

2級 【シーチング組み立て】傾向と対策

<地直し・布目>

・持参したシーチングが厚すぎたり薄すぎたり、糊のききすぎたもの・腰のなさすぎるものなど、ジャケットのシーチング組み立てに適さないものを使用すると、シーチング組み立てがうまくいかず減点されることが多い、例えば袖山のいせなどは厚すぎたり、糊のききすぎたものでは袖のふくらみをピン打ちで表現することが難しいので、標準的なシーチングを購入し使用することが望ましい。また、シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないときもあるので、試験以前の課題として、適切なシーチングを正確に地直しして持参するよう心掛けていただきたい。

・シーチングの地直しは最低縦方向と横方向の2本の基準線がないと地直しができないと思われる。基準線のないシーチングにパターンをトレースする段階で作図の基準線を記入すると、地の目が不正確になりシルエットに歪みが出る場合がある。またトレースするときは定規を使用して、さらに文鎮やプッシュピンを適切に使用すると正確で効率よいトレースができる。

<身頃>

・縫い代のカーブ部分に入れる切り込みの位置や深さが不適切なためにシルエットを崩したり、膨らんだカーブ線などの不必要な部分まで切り込みを入れているものもあった。一般的には、1cm前後の一定の縫い代をつけた状態で、切り込みを入れなくても収まる程度のカーブ線が縫いやすく、美しい仕上がりが期待できるので、縫い代幅（裾・袖口は3～4cm、他は1cm程度）も正確にして裁断し、アイロン処理することで実物の仕上がりに近いシルエットを出すことが可能であると思われる。

・シーチングのピン打ちは、縫い目線、ダーツは中心高に片倒してピン打ちするのが一般的であり、縫い目線に対してピンの方向は斜め・直角・平行など止める角度に正解があるわけではないが、ピンのすくいが多すぎるもの、少なすぎるもの、ピンの間隔が広すぎる、狭すぎるなど、不正確なピン打ちでシルエットを崩している場合は減点の対象になる。

・組み立てたジャケットをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせ、シーチングが着崩れないように、必要な箇所にピン打ちすることが望ましい。模範解答を参照のこと。

・後ろ中心の始末は、模範解答のように左後ろ身頃の中心部分を裁断して、伏せてピン打ちするのが望ましい。

< 衿・衿付け >

- ・ 衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが縫い代を付ける場合は、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打ちはしない方が望ましい。
 - ・ 衿付け線のピン打ちは、縫い目線のきわを衿付け線に沿って平行に止めるべきである。
- 衿の縫い代は折らずに、切り込みを入れ身頃に重ねてピン打ちしてもよい。

< 袖の振り・袖付け >

- ・ 肩パッドが縫い代端まで届いておらず、安定した状態での袖付けが出来ず、見栄えが悪いものが見られた。肩パッド付けはアームホールの縫い代にパッドの端から端までがしっかりと掛かるように設定し、はみ出した余分な部分はカットする必要がある。
- ・ 身頃、袖アームホールの合い印がトワルに反映されていないもの、合い印の不足も見られた。
- ・ 袖山部分のピン打ちは、折山のきわからピンを刺し縫い代だけ止め、ピンの先を表に出さずに止めると、袖山の膨らみがきれいに出る。袖底部分は内側から止めるべきであるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものがあった。ぐし縫いをするなど、ある程度いせをセットするなど工夫が必要ではないかと思われる。
- ・ 明き見せ部分のピン打ちの不備（明かないもの、エッジの始末の不備）があった。

< 両玉縁フラップポケット >

- ・ 身頃にポケット位置を正確に印し、その上に上玉縁とフラップをピン打ちする、または上玉縁をフラップに書く。下玉縁はフラップで隠れるので、あってもなくてもよいとされている。
- ・ フラップの丸みは角のないよう縫い代の処理をすること。

< ボタン（身頃） >

- ・ 丈が長めで2つボタンなのでボタン位置とバランスがとりにくい様であった。